

(1)

ペンチャワール会報

No.1

～アジアで共に生きる～



ペンチャワール会会員の皆様へ 中村 哲 (3) 報告とお願い 佐藤 (3)
発会式講演会 (4) 支援の輪を上げよう 新貝・藤井・早田・田原 (4)
入会者から一言 (5) 会員名簿 (7) 編集部 (10)

中村 哲医師（福岡徳洲会病院に勤務時代のもの）



写真提供 毎日新聞社



中村哲医師が着任するペシャワール

ペシヤワール会会員の皆様へ！

中村 哲

みなさんお元気ですか？ 二〇二〇年ロンドンに来てから、はや二ヶ月がすぎました。現在、語学校で英語を学んでいます。十二月中旬にリパブルに移り、熱帯医学の研修をすることになっています。「研修」といえばきこえがよいのですが、われわれ臨床家には、患者の診療ができないということは大変な忍耐が要ることで、ぜいたく乍ら「失業者」の気分です。毎日うす暗い天気と単調な街並みの中で、あの明るいパキスタンのことを思います。しかし、ペシヤワール会のみなさんの暖い好意と期待を思うと心が自然に軽くなります。

九月の発会式ときには、思わぬ方々から多くの御支持と励ましをいただいて本当に感謝でした。多くの心ある方々が、夫々の目立たぬ場所から暖い励ましの声を送って下さっていることを実感しました。こういうたいくいのことは、えてして悲憤な出征兵士のように、重苦しさと感傷的な気分のみたされやすいものです。しかし、私だけが自分でなにかをするのではなく、もつと広くて大きな、人々の良心の奥にあるものに支えられているという実感が私を楽天的にします。

発会式の時に述べたように、これはみんなの事業です。多くの人々の努力と良心を束にして初めて続けられることだと思えます。説教がましいお題目や、ややこしい理屈をぬきにして、善意を素直によせ集めあつて、この会を続けてゆこうではありませんか。そしてそれは、私たち自身のためでもあります。何も海外で派手な活動をするのみが目的ではありません。このペシヤワール会の活動を通して、ともしれば散ら

ばって力を出せない、人の良心の輝きが、自己満足や屈折した気持を超えて私たち自身をうるおすように祈ります。そしてそれは、夫々の持ち場で時には虚無感にさいなまれながら苦闘している人たち——あるいは治る見透しのない病人のために心をくだいている人々、あるいは国内の離島で献身している人、あるいは一介の「町医者」として患者のために最善のものを求めて苦闘している人たち、あるいは教育者、一介のサラリーマンとして社会生活の中で良心的たらんとして悩む人々——これらの人々がそれぞれに力を与えられることでしょう。

ともあれ、戦いは既に開始されました。戦いである以上は実際に勝利をめざすものでなくてはなりません。いたずらに発展途上国の人々の窮状を絶叫するのみではなく、みんなの知恵と賜物をよせあつめて、実際の行いを通して私たちのめざすものを着実に実現させてゆかねばなりません。そしてそれには長い時間と忍耐が要ります。せひとも、このペシヤワール会が継続性をもって着実に拡大し、私たちの良心の共通の灯として、今後とも人々の心に訴え続けることができるよう、力を合わせてゆきたいと思えます。そして私の体験をみなと分かちあい、一体となって仕事をすすめてゆきたいと思っています。

今後とも力強い御支援を乞うものであります。
中村 哲さんご家族の現住所は左記の所です。

・Elmswood

North Mossley Hill Road

Mossley Hill

Liverpool

L18 3JP

事務局からの報告とお願い

ペシヤワール会が発足してまだ数か月ですが、十一月末日現在会員数が六二名にのぼっていることをまずお知らせいたします。福岡県をはじめ九州各地、全国各地から入会の申し込みと励ましの言葉をいただいています。その反響の大きさにおどろき、また皆様の善意に感謝している次第です。

本会のこれまでの活動について御報告いたします。中村医師がJOC S派遣医としてパキスタンで長期診療に従事することを知った彼の友人・同僚や長年JOC S活動に関心を抱いておられた人達、母教会香住ヶ丘バプテスト教会員を中心に、中村医師支援の会を結成しようという動きがもりあがり、本年五月に第一回準備会が開かれました。その際、まず会の名称を赴任地の名前にちなんでペシヤワール会と命名しました。趣意書・会則を作成し、事務局を福岡YMCAの御好意により交通の便の良い福岡市天神地区にある福岡YMCA本館に置くことにしました。

九月十八日にペシヤワール会発会式と記念講演会を福岡市立中央市民センターで開催しました。この会の様子については本紙に別に報告していますが、マスコミも大きな関心を寄せ、新聞で大きく取りあげられ、さらにNHKのテレビとラジオでも報道されました。

つきに、本会の組織について簡単に御説明いたします。この会は全くのボランティアの集まりで、会員一人一人の創意工夫に基づいて運営されることが原則ですので、あまり強固に組織化されたものではありません。会長にはJOC S発足当初から長年にわたってJ

OC Sの活動を支えてこられ、さらに中村医師がパキスタン派遣医に決まる際に御尽力された間田直幹氏（九大名誉教授、現中村学園大学学長）にお願いしました。具体的な活動計画の立案や運営にあたる事務局は現在一〇名からなり、それぞれ書記、会計、会報編集などの任を分担し、毎月第三日曜日、午後三時から福岡YMCA本館の定例会を開いています。また会報の宛名書きや、発送、名簿の整理などで、ボランティアの方々に手伝っていただいています。事務局のメンバーは決して固定的でありませんので、多くの方々に参加していただき、頭と手と足を提供していただきたいと願っています。さらに会の運営に対して高所から指導と支援をしていただくために、運営委員会を作りたいと考え、現在会員の中から若干名の人達にお願いしているところです。

これからの活動については、中村医師にあわせて計画をたてていきますが、当面のこととして、来年4月下旬に総会の開催、年4回程度の会報発行を予定しています。中村医師は本年十二月から来年四月まで英国リバプールで熱帯医学の研修を行い、四月に一回帰国した後五月下旬パキスタンに赴任することになっています。日本に帰国している期間に、いくつかの場所（病院、教会、学校など）で講演会を開くことも予定していますので、会員の中で自分達のところにも来てほしいというような希望がありましたら、事務局の方にお知らせ下さい。中村医師一家出発に際して具体的にどのようなものが必要なのか、今からどのような援助をするのかは現在検討中です。さらに、長期的な支援方法については、現地に赴任してからの情報に基づいて立案していくことにしています。私どもの会が、

中村医師の目指しているパキスタンでの医療活動を長年にわたって支えていくためには、大勢の人達の善意が必要です。会の拡大や運営の仕方などに皆様のアイデアと力ぞえをお願いいたします。

（ペシャワール会事務局長 佐藤雄二）

ペシャワール会発会式・記念講演会

中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援するペシャワール会の正式な発会式とそのことを記念する講演会が去る九月十八日(日)に福岡市中央市民センターで開かれました。当日は、中村医師をそれぞれの立場で支援しようとする方々及び一般市民の方々、約300名が参加され、中村医師の手柄を反映してか、終始熱い思いと感動に満ちた会でした。発起人の一人である佐藤誠氏の司会で始まり、ペシャワール会の正式な発会にあたり、発起人代表の間田直幹先生から開会のご挨拶がありました。続いて、中村医師派遣の日本側窓口として、物心両面より支援して頂くJOC S（日本キリスト教海外医療協力会）の総主事をされている奈良常五郎氏から、JOC Sの活動紹介と中村医師への激励がなされました。このあと同じくJOC Sから派遣された、永年、ネパールでの医療活動に従事された岩村昇先生（神戸大学医学部教授）から、「アジアでの医療活動を通して」という講演がありました。岩村先生のお話しは、先生の永年のアジアでの働きに裏打ちされた卒直な力強いもので、同労の志を頂く、中村医師をはじめ、そのことを支援する私達一人一人にも大きな励ましと示唆を与えるものでした。続いて、中村医師より、赴任地パキスタン及びペシャワールの模様がスライドで紹介され、併せてこれからの赴任にあたっての

決意が述べられました。淡々とした実直な中村さんの語りは、それだけに中村医師を通してアジアの民衆に連帯し、共に生きる姿勢を私達に強くアッピールし、支援の輪を拡げていくことの大切さを一人一人に改めて教えられました。このあとペシャワール会事務局長佐藤雄二氏より、これまでの準備状況、発会時点での会員の状況、今後の取り組み等について報告がなされました。続いて、中村医師にそれぞれ関係の深い香住ヶ丘バプテスト教会藤井牧師、福岡登高会会長新貝さん、国立肥前療養所田原医師、徳洲会病院甲斐さん、福岡YMCA小林総主事から、それぞれの立場で支援の輪を拡げるためのアッピールがなされました。最後に、中村医師の尚子夫人、秋子ちゃん、健くんのご家族紹介があり、ご家族を代表して、中村哲医師のお母様からお礼のご挨拶がありました。約三時間に及んだ会でしたが、参加者一人一人に深い思いと感銘を与えられた会でした。

（事務局広報担当 志満秀武）

中村哲ちゃんの支援の輪を拡げよう

福岡登高会 新貝 勲

福岡登高会会員である中村哲君がこの度パキスタン回教共和国のペシャワールにあるミッションホスピタルへ一家とともに永住医療活動する事になった。昭和五十三年、当会のヒンズークシヒマラヤのテイリッチ、ミールへの登山に同行医師として参加した時から彼とパキスタン住民との付き合いが始まった。彼はその時に見た北西辺境州の山岳地帯の無医地区の住民が、医療設備がない為の悲惨な状況を見て意を決したので

あろう……。

私共はパキスタンには大変御世話になっている。それはヒンズークジヒマラヤ、カラコルムヒマラヤをもつ山岳地帯に毎年毎年世界で一番多く登山隊を出しているのが日本であるからである。我が会の中村哲君が医療奉仕に行く機会を千載一遇のチャンスとして、せめてその萬分の一でも彼に協力、ひいてはパキスタンの無医地区の人々へ御恩返しをしなく思っている。どうか末長い暖かい御援助を御願いたい。

「時、満ちて。」

香住ヶ丘バプテスト教会
牧師 藤井 健児

この度、我が教会の中村哲きようだいを、日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)の派遣医師として、パキスタンのペシヤワールに送り出すにあたりまして、主にある諸教会はもとより、医療関係の方、山の仲間、更には一般市民の皆様に至りますまで、実にたくさんの方々から絶大なお祈りと御支援を頂きました事を、母教会の牧師と致しまして心から感謝致しております。

少年の日にキリストと出会って人生観を変えられた彼は、それまでの夢でありました作家志望の道をおつさり捨て、医学部に進み、将来は医療の谷間にある人々の為に働き度いとの決意を固めたものでした。

以来二十年余の月日が流れましたが中村兄の思いはいささかも変わることなく多くの研さんを積み重ねて時の熟すのを待っておりまして、これこそ神の御計画でありましょうか、現地の要望とJOCSの計画が奇しくも一致し、而も、彼の多年の念願が叶えられてここに至りましたことを正に「時は満ちて」と我が

事のように喜んでいる者でございます。

これからの中村きようだいの働きのために、亦御家族のために尚一臆の御加禱と御協力を切にお願い申し上げます。

西南学院中学校教諭 早田美代士

去る五月十八日のこと、中村哲君が母校である西南学院中学校に私を訪ねて来ました。久しぶりに会う中村君は、中学生の頃と変らないすっかりした飾り気のない口調で私に近況を知らせてくれました。その中にパキスタンとか岩村昇先生といった言葉がありました。そして中村君自身が家族と共に、パキスタンのペシヤワールへ医療活動のために出かけるといふこと、それも一時的にはなくできれば十年間位と聞いて、その淡淡とした語りの中にある中村君の尋常でない決意をはつきり知らされる思いでした。

誰かが遠い地で何かをする、というのではなく私の前で静かに語っている中村君が、他から動かされることのない決心と祈りで、ひとりの人間として同じ人間を愛するために活動するのだといふことで、私は話を聞きながら心の洗われる思いでした。

彼の活動に期待すると共に、彼の決意と行動の中で少しでも支えとなる自分に可能なことは何かと、「みんなまで生きる」支援の輪の中に加わりたく思っています。

国立肥前療養所医師 田原 孝

中村先生が日本を離れてから数ヶ月が過ぎました。

この間、中村先生を支える会(ペシヤワール会)も地道な道を歩みはじめています。

かつて、先生が在籍された国立肥前療養所も微力ながらお役に立てば、という願いからその一員として参加しています。

先生のいらした十数年前とちがって当院も様変わり、先生を記憶している人達も少なくなりました。先生の活動の様子を拡めるためにも、資金集めのためにも、来年4月、帰国のおりには肥前での先生の講演会を予定しております。

肥前での活動が10年、20年と長期にわたることを我々は願っております。

ペシヤワール会発会式

出席者・入会者からの感想他

・感動的な会でした。中村兄の行動力に心からの支援をおくりたいと思います。

(川野直人さん・田隈バプテスト教会牧師)

・出席出来まして感謝します。アジアの友と生きる良きお働きを支える一員に加えていただきましたが、小さな働きしか出来ません。祈らせて頂きます。

(鶴崎方子・福岡南教会員)

・「海外医療協力」というと何か大げさなイメージですが、その本当の意味を今一度考えさせられ、同時に私自身の生き方を考えさせられる良い機会でした。また祈りの必要を覚えました。(斉藤淳子、宮崎医科大学学生)

・数年前、インドをしばらく歩いた後、岩村先生のお話をきき、関心をもっていました。専門的な知識や

技術がないので、具体的な活動ができなかったのですが、何か自分でもできることがあったらと思っ
ています。教会にも所属しておりませんが、ご連絡お
願ひします。
(大野宏子・城原小学校勤務)

・岩村先生の話が面白かった。中村先生の解説付きの
スライドをみる事が出来てよかった。

(古屋淑子・大牟田北高校生徒)

・私は地域で働く保健婦です。二十年前よりの願ひで
あった岩村先生のお話もきけてうれしく思っています。
中村先生の真しな態度に感激しました。私自信
も甘えをすてて、現状の中で、何ができるかを考え
てみるこの大切さを再認識するとともに、日々に
感謝して生きることを……。

(古賀初子・福岡県山門保健所)

他にも多くの方々にご記入頂いていますが、紙面の
都合で割愛しました。ご了承下さい。

来夏・パキスタン派遣に備え

熱帯医学など勉強へ

古賀町の中村医師 あす英国へ出発

「無医地区の住民のために、こ
の生涯を」——日本キリスト教海
外医療協力会の派遣医として来年
五月にパキスタン北西部の辺境・
ペシヤルに赴任する福岡県糸
屋郡古賀町久保の中村哲医師(56)
が二十七日、語学や熱帯医学など
を事前勉強するため、家族を連れ

てロンドンへ出発する。「妻には
ペシヤルに十年は住むと言っ
てきかれません。医者として無医
地区を見逃せません。事前勉強
もたつぷりしてきます」と中村
医師は張り切っている。

中村医師がパキスタンへ救済医
療を思いついたのは、福岡登高会
(福岡市・新員町)が五十三
年に行ったテイリチミール遠征に
参加した時。ペシヤルを拠点
にしたが、この地方の医療水準の
低さに心を痛めた。ペシヤル
はシルクロードのインド側起点
で、北西辺境州の州都。人口は約
五十万人。ところが、無医地区が
延々と続き、十人に一人は結核患
者、千人に五、六人はハンセン氏
病患者だった。

遠征から帰国した中村医師は
「機会があれば、ペシヤルの
ようなところで医療に携りたい」
と思ひ続けた。だから、九大医学
部時代に専攻した神経病学のほか



中村 哲医師

に、福岡市周辺の病院などで麻酔
科、脳外科、内科全般など幅広く
医療の腕を磨いた。

一方、長い間ネパールで医療活
動を続け、海外医療活動の先駆者
的医師として有名な岩村昇・神戸
大教授に相談したところ、日本キ
リスト教海外医療協力会とのコン

タクトを勧められた。そこで、昨
年八月、同協力会に連絡を取った
ところ、偶然にもペシヤルか
ら医師の派遣要請が来ていること
が分かり、二つ返事で引き受け
た。

中村医師は昨年末とことし四月
の二回にわたり、赴任するペシ
ヤルの病院を訪問。辺地医療に

情熱を燃やす院長と意気投合し
て、来年五月の再会を約束してき
た。この病院は、ベッド数百五十
床なのに医師はわずか四人だけと
いう。

パキスタンの医療事情について
中村医師は「住民の衛生観念が低
く、不衛生ゆえの病気が多い。貧
富の差が激しく、病院にかかれる
のも裕福な人だけに限られてい
る。山岳地方はほとんど無医地区
ばかり」と指摘。「早くペシヤル
ルへ行つて、病気に苦しむ辺境
の人たちを救わねば」と早くも気
持ちは現地へ飛んでいる。

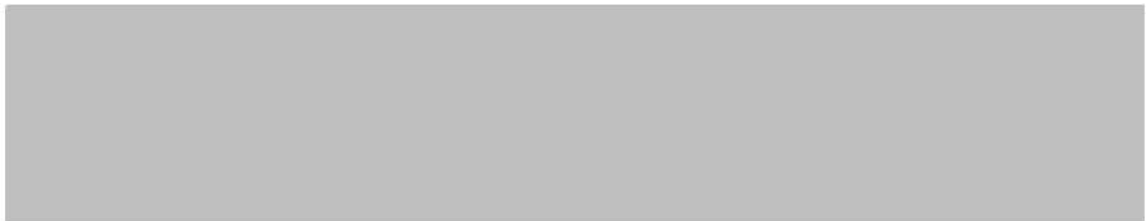
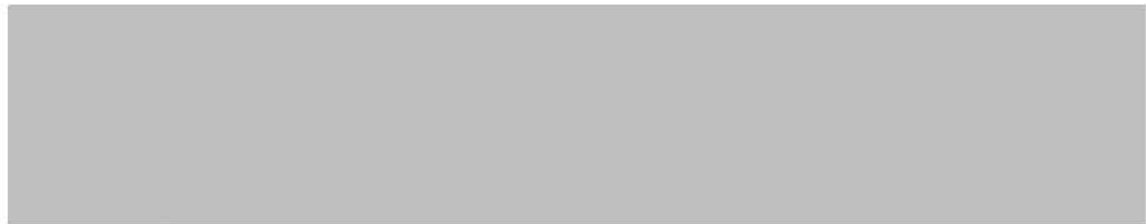
赴任は来年五月。それまでに必
要なのがパキスタンで公用されて
いる英語のマスターとマラリア、
腸チフスなど熱帯医学の研修。こ
のため、二十七日に福岡を出発し
たあと、二十八日成田からロンド
ン入りする。妻岡子さん(53)長女

秋子ちゃん(23)長男健ちゃん(2)
も一緒に行く。

ペシヤワール会会員名簿

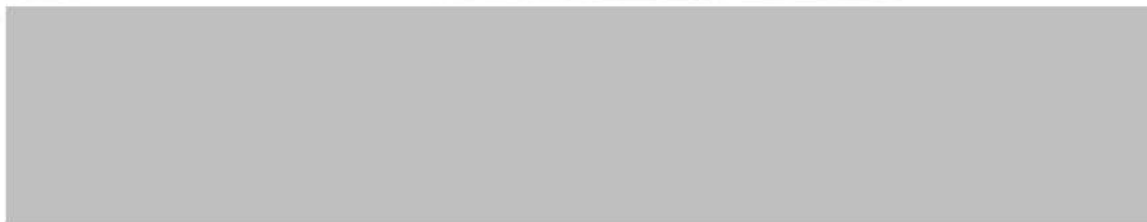
(83年11月末現在)





C

()





⑫ (1) この名簿をもちまして、会費の領収書にかえさせて頂きますのでご了承下さい。

(2) まだ会費納入ができていない方は、できるだけ入金頂きますようお願い致します。

(3) もしもお名前がまちがっていたり、十一月末時点でお名前がおちている方がありましたら、お手数ですが事務局までご連絡下さい。

編集後記

● 九月に会が発足して、多くの方々にご入会頂きお礼申し上げます。この間、会として、特別のお知らせも少なく、ようやくこの会報を年内にお届けできて、ほっとしています。会の事務局もよちよち歩きで、特に入会名簿等にミスがあるのでと思います。お気付きの点ありましたらご一報下さい。

● 12月20日(火)西日本新聞夕刊面でこの会の模様を大きくとりあげて頂きました。そのこともあって12月にも多くの方々にご入会頂きましたが、そのお名前は次号で掲載させて頂きます。

● イギリスの中村哲さんから皆様宛クリスマスカードが届きました。ご家族みなさまお元気です。

● 会員目標は三〇〇〇名です。会費は年額一口一、〇〇〇円。今後共よろしくお願ひします。

● いろいろとした会の仕事を毎月第三日曜日の午後三時より行なっています。お時間のある方はお手伝い下さい。なお一月のみは二十二日(日)に行ないます。又原稿寄稿等歓迎しますので、事務局までご連絡下さい。(事務局)